

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	小説の批評
Author(s)	渡邊, 格司
Citation	龍南, 219: 109-111
Issue date	1931-11-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7040
Right	

小説の批評

渡 邊 格 司

近年龍南の小説が振はないと學生諸氏も言はれるし私も亦同感せざるを得ないので、然し文壇だつて一讀三歎の佳品はあまり見當らないやうですね、創作といふ手工業品は時世後れになつてしまひ、捌けないから出ないんだらう、と言ひ切つてしまふには私は餘りに昔日の新思潮時代を夢みてゐるのですが。

固定した磁石、ある看護婦が愛欲について抱いてゐる考の方向は矢張一定の方向を指して變ることがなかつたといふテーマでありましたが、私としては推賞したい點、非難したい點、それが多分にありました。こういふ未完成作品には殊にその感が深いのを常とします。龍南諸君が此の作品に就いて考へるのも意義があると思ひ其點をとつて私は茲に推薦する次第です。

俊寛、俊寛ものとしては行き方が少し變つてゐて、それだ

小説の批評

け其點に作者の意圖を讀みとることが出來ました。歴史的に持つ意義はこの俊寛には認められませんが、自然人と教養、愛と同情、是等のテーマを組合せた點に敬意を表するのです。小品二つ、こうしたアレゴリーは深い認識のものに意圖を見出さないとときカリカチュアに墮してしまふものです。私達是这样いふ作品の人を小馬鹿にした態度を好みません。人生は嚴肅なものです。シルレルのワレンシュタインと共にこう叫び度くなります。

鑛山くるゝ、坑夫の生活描寫としては忠實と言へませんしイデオロギーは徹底を缺いてゐます。作者の言ひ分はあることとせうが、其處にひつかりを生じて凡作になりました。

三造、父の死に遭ひ自分の責任を自覺するといふのですが京都から故郷までの旅行記が殆ど全部で纏つてゐません。寧ろ旅行記は不要なものであつて、故郷に於いて煩悶し自覺に

至る徑路を書くべきだと思ひます。且、父の葬式の時に於ける作者の態度は、誠に作者が父の死に直面されたかを疑はしむるものがありました。

或る試作、丸ビルマンの空虚な生活から来る虚無的な氣分を描いたもの、作者はこの作品のこうした。プロットを懷疑的に思ひ返へしてゐられるが、私は寧ろ此のプロットを徹底させて、彈機の伸びて反撥の力もないサラリーマンの氣分描寫に終始した方がよいと思ひます。必ずしも小説はテーマ小説である必要はないと思ひます。

病める夫人、肺結核の病床にゐる享樂的な有閑夫人の愛欲の末路を描いたもので、全篇歴史的現在の筆で素直に運んでゆく手際随分と達者に見えましたが、人物描寫がお座なりであることゝ、豪奢な夫人の寢室がリノリウム張りであつたり、舞踏會の華かな零圍氣に体臭が漂つたりして、ボロが見えたことは感心出来ませんでした。

彼女、一名接吻を教へる女

吉村陽の履歷

この一篇は何れもサンデー毎日にでも出てくるやうなものでした。前者は純眞な學生を誘惑するエロティツクな女、後

者は友愛生活、何れも現代的な特異性をもつた作品です。別に高山樗牛と共に須らく現代を超越すべしなど、私は言ひませんが、こういう零圍氣に頭を突込んで、無批判的であるのは苦々しいことです。

島の傳説、これは小説でなくて旅行記です。旅行記としての別の取扱を致し度いと思ひます。南國の異國的な豊麗な情景は珍らしいものと思ひました。

情景散文詩、一幕五場。これはドラマの形式を借りた五つの場面の散文詩といふのでせう。然し各場面の効果から言へば或はドラマティツクであり、或者は散文詩的であつて、一幕全体の印象は纏まつたものは得られませんでした。作者に戯曲構成の能力を缺いたが、作者は意識的にレビュー的效果をねらつたのか、私には何れとすべきか判りませんでした。後者とすれば看客はあまりぞつとしないのでせう。

僕のフキルム。『愛、秋の日記、情熱』三篇からなる短篇集であります。一讀したあとでナツハシユマツクを味はつてみると秋の日記が主体で、愛はプロローグ、情熱はエピローグ、のやうに感ぜられるのです。それぞれ別の短篇ではあります。とにかく三篇を通じて魅するやうに輕快な筆のツツ

チは東郷青児の繪を見るやうな感じを與へますし、尙青児の繪よりもニユアンスが複雑のやうです。この作品の暗い明るさは私には奇妙に好ましく思はれます。三篇の中は秋の日記が最も上出来です。龍南の文學からこうした作品があらはれとは私の豫期しない處でした。龍南人の中にはこの作品から氣持の遠い人も多々あるでせう。こういふ世界、零圍氣、單純の中に複雑な色彩をどんなに味ふべきでせうか。小説中の道徳感が自分のそれと背合せであるとか過去のブルジョア文學とか評する人は、比喩の見當は外れてゐますが歌舞伎を見に行つてその筋を見ようとする人です。作品アンジツヒに謂つて此の作品は佳品たるを失ひません。此の人のセンチメントを味はつて見ようではありませんか。

本年は以上十二篇集まりました。量も質も例年と比して特に目立つ點はありません。例年と異なる處は戀愛描寫に於て特に詳細に（龍南の立場から）渡ると思はるゝ作品のあつたことです。私はそれに對して何の辭も申上げません。諸君の認知がそれを判斷さるゝ事と思ひます。もう一つ氣づいたことは小説中の會話が大体に於て上手でありませんでした。此の點は修業の餘地大いにありと感じた次第です。 妄言多謝

小説の批評

